

## 基調講演

青少年育成運動活性化研究協議会

### ■演題 親や大人の青少年育成の姿勢を変えよう

■講師 社団法人青少年育成国民会議副会長 上村文三氏



#### —— 講師のプロフィール ——

〈現職〉

社団法人青少年育成国民会議副会長(平成10年5月～)、日本青少年育成学会事務局長、財団法人日本ユニセフ協会理事、財団法人あしたの日本を創る協会常任理事

〈略歴〉

世界青年会議日本委員会事務局長、社団法人青少年育成国民会議事務局長、社団法人青少年育成国民会議専務理事、前流通経済大学講師

〈政府委員等歴〉

元文部省社会教育審議会委員、元文部省ユネスコ国内委員会委員、元文部省生涯学習委員会特別委員、元総理府青少年問題審議会専門委員

〈表彰歴〉

平成8年 外務大臣表彰

〈主な著書〉

『「いじめ」その要因と対応策』、『現代リーダーシップ論』、『がんばれ子供、若者たち』、『青少年育成運動推進者の手引き』(平成16年3月) ほか

### はじめに——地域で手作りの育成を

みなさん、こんにちは。

皆様は、大変お忙しい中をかねがね地域の、あるいは職場の青少年の指導に大変ご尽力をくださっております。心から御礼を申し上げます。

青少年育成国民運動がスタートいたしましたのは、昭和41年でした。初代の会長は、東京大学の有名な学長さんで小さな親切運動を提唱された茅誠司先生でありました。

北海道にも同じ年にこの協会がスタートいたしました。その時の会長さんは杉野目先生だったと記憶しております。私は、その当時からこの運動に参画をさせていただきまして、ずっと40年間この運動の中心になったり、あるいは後ろから支えたりしながらこんにちまで過ごしてまいりました。

今日は、青少年育成運動が大変難しい時期を迎えておりますので、私自身も大変迷っているのですが、今後どうしようかなという方々で青少年の育成を進めたらいいだろうかと

ということでは話をしなさいということでしたので参上させていただきました。

先程、佐々木会長さんからいろいろご紹介をいただいたような形で、私自身が携わってきたこの運動を振り返りながら、青少年の状況はますます難しくなってきたので、青少年の問題提起をさせていただきたいと思っております。

さて40年前にこの青少年育成国民運動が構想されたのは、皆様ご承知の通り昭和39年、40年頃が戦後第二のピークといわれた青少年の非行が大変増えた時期であります。この事態にどう対処をするべきかということで現在も残っておりますが都道府県の青少年問題協議会、あるいは市町村の青少年問題協議会の関係者の方々に東京にお集まりいただきまして、自分たちの経験を踏まえながらいろいろ協議をしていただき、その結果やはり行政と一部の人の努力だけでは現在の青少年非行を防止することは難しいのではないかと。したがってできるだけ多くの青少年と関わっていらっしゃる団体、

あるいは個人の方々、あるいは企業の関係の方々にも参加していただいて、国民運動としてこの青少年の非行を防止しなければいけないのではないかと。これがスタートの大きな動機でありました。

しかしそれと同時に、昭和41年という日本が戦争に負けてちょうど20年が経っている時期であります。それを踏まえていつまでも後ろ向きの青少年の非行を防止しようという運動でいいのだろうか。むしろ今将来に向けてどういう青少年を育てるのか。そのために我われの知恵をどう集中しようかという立場で運動するべきではないかということでの運動がスタートいたしました。

その当時のスローガンは、「伸びよう伸ばそう青少年」でありました。つまり青少年の非行をなんとか押さえ込むというのは、子どものやっつけていることを上から見て、「これは間違いだからこうしなさい、ああしなさい」という、むしろ大人の考えを、ある意味からいうと押し付けるスタイルの育成になりやしないだろうか。そうではなくて

青少年の育成というのは、子どもたちが自らどういうふうにならぬように成長していかうかという気を起こさせる。それを大人が応援していく。そういう意味で主役は青少年だ。だから「伸びよう伸ばそう青少年」というふうなスローガンを掲げたわけがあります。

このスローガンは、当初「伸ばそう伸ばしよう青少年」となっております。それに対して「伸ばそう伸びよう青少年」というのは、大人の考えに子どもを引っ張っていくというニュアンスになるから駄目だということ、「伸びよう伸ばそう」となったわけがあります。

私は、この考えは、あるいはこれから先も青少年を育てるといふ姿勢は、やはり「伸びよう伸ばそう青少年」でなければいけないと思っております。

自ら伸びていくのだ。目標をもってそれに向かつて進んでいくのだという逞しい気持ちを持った子どもを育てていくというのが我われの運動の中心でなければいけないのではないかと思っております。

それから、さらにこの運動をスタートし



た時の2番目の大きな目標が、親や大人は子どもの手本になっていくのではないかという意味で、いい家庭、いい社会環境をつくりましょうというのが運動の第2の目標でありました。

その目標は、今もずっと続いておりますが、特に強調されましたのは14年前、15年前に神戸で非常に悲惨な事件がありました。ああいう事件がなぜ起こったのだろうかとい

ういろいろな反省をいたしまして、私どもは「大人が変われば子どもも変わる」というスローガンをつくったわけです。それはどういう意味だったかという、やはり大人が子どもに生きていく姿勢を示さなければいけないという意味で、「大人が変われば子どもも変わる」というスローガンをつくったわけであります。

この姿勢も、今も、これから先も私どもの青少年育成運動の大変大事な柱にしていかなければいけない。そして間違っていない方向だと私はそう思っております。

3つ目の柱は、行政が旗振りをやるだけではなくて、やはり行政と民間がタイアップして、そして本当の意味の子どもを育てていくという国ぐるみの、あるいは県民ぐるみの、市町村民ぐるみの運動にしなければいけないという願いがありました。そしてこの願いは、今もずっと続いておりましたし、これからも是非続けていかなければいけない姿勢だろうと思っております。

ところが先程部長、あるいは育成協の会長の話の一部にも出たようでございますが、

日本の国が大変財政状況が厳しくなった。特に竹下内閣の頃からだんだん国の借金が増えてきたという状況があります。私の記憶では、竹下さんが新年の青年団体との互例会に出て来ていただいて、国の借金が増えたというけれども、国民の貯金は、1200兆もあるではないか。1200兆も貯金を持つている国はどこにもない。だから少々の借金ができたとはいっておろしな国で、一番大事な国の政策の基本は続けないではないかと、こういうような挨拶をされたことを記憶しております。

その後もずっと日本の国の借金は、どんどん増えてきまして、昨年頃になりますと800兆円を超えた。一人頭の借金は650万円になった。だから今まで国が大盤ぶるまいをしてきた補助金とか特別の委託費というものはやめにしようではないか。そのため大改革をしようという動きが出てきたのはご承知の通りであります。

そして青少年育成国民運動という政府と民間でタイアップしてやろうとしてきたこの運動も改革の対象にされまして、国の補

助金とか委託費が優先的に回ってきたのが、だんだん変わってまいりました。これを、スローガンは大変よろしいのですが、官から民へという言葉が出てきたわけです。私どもは、民の代表みたいなつもりだったのですが、この民というのはどうも株式会社とか企業を念頭に置かれたスローガンだったみたいでありまして、補助金とかそういう国の大事な施策も全部競争入札というスタイルに変わってまいりました。

ところが社団法人とか財団法人というのは、あまりお金がない。やる気のある人と知恵を持った人が集まった集団が、私は財団法人とか民間の社団法人だろうと思っっています。一般の企業と競争するかどうかどうしても落札できなくなってしまうわけです。

本来であれば私も青少年育成国民会議と内閣府と財団法人北海道育成協会との三者で力を入れてやるべき事業だったのかなという思いがするわけですが、ひとつの歴史の流れみたいなものですから、これはやむを得ない。そういう実態を踏まえて、これから先の育成運動を考えていかなければ

いけないのかなという思いをいたします。

今申し上げました経過を辿ってこんになつたわけですが、それを踏まえてどういう運動を進めていったらいいだろうかといういろいろ考えまして、これから先の運動は、先程申し上げました3つの姿勢を土台に置きながら、もっと身近なところで手作りの青少年育成を進めていく。こういう方向を辿っていかざるを得ないのではないか。そうした方向を辿るべきではないだろうか。

数年前から地域で子育てという言葉がやはり言葉になりました。それをもっと確実なものにして、手作りの身近なところで子どもを育てていく、見守っていく、そういう運動にしていかにざるを得ないのかなと思えます。

## 一 地域診断による現状点検

そこで手作りの育成運動を進めるためには、どうしたらいいだろうか。そのためには、レジュメの二番目にあげております地域診断で青少年の育成の現状をちゃんと点検することが必要ではなからうかと思えます。

その地域診断をどういう方法でやるかということにつきましては、資料1のほうに私の地域診断と、先程育成協の会長さんがおっしゃった内閣府は青少年についてどういふふうに関心を持っているかというものを資料1にまとめてみました。

この地域診断というのは、ここにも書いておきますとおり細かい調査をした上で、その調査から我が地域はこうだ、ああだというふうになると大変なお金がかかります。そうではなくて、青少年のことにつきましては、いろいろなデータがたくさん集まっております。みなさんのお手元に今日も北海道の青少年の非行の状況はどうだ。就職の状況はどうだというような資料をたくさん配っております。

そういうことを詳しく読んで、今北海道の青年はこうなっているのだなという現状を正しく把握していくことを、私は地域診断というふうに呼んでおります。あるいは、みなさんが仲間同士で集まって、今自分たちの地域の青少年はどうだろう、子どもはどうだろうという話し合いをする中で、自分

の地域の子どもの状況を捉えていくのが地域診断である。その中から、こういう状況

に子どもがあるから我われの運動はこうしていきましようというのも診断をして今後の方向を示すのも実践を含めて地域診断という言葉で私は今まで呼んでまいりました。

私自身がそういういろいろなデータとか新聞、テレビに出てくる日本の青少年の状況を診断した結果、ここに12項目絞り込んでみました。これは、本当をいいますと30項目くらいあったのです。似たものを全部集めまして絞り込んだのが12項目であります。いずれも皆様それぞれよくご承知の青少年の状況であります。

そして下のほうの2の青少年の現状は、平成20年度の青少年白書からというのを項目だけ並べてあります。白書の一番最後に、特集として家庭地域の変容と子どもへの影響というのは、先程会長さんが一部をご紹介していただきました。この青少年白書というの、政府刊行物センターで売っております。誰でも手に入れることができます。是非欲しい人は手に入れて読んでいただき

たいと思います。

ここにあげました私の診断と政府の診断は重なるところもあります。全然私の意識には入っていない問題点も白書には入っておりません。それは、私は違ってよろしいと思います。つまり地域の状況、地域の子どもの状況を見る人の立場によって、あるいはどの地域を対象とするか、どの年齢層を対象にして地域の子どもの診断をするか。その立場によって結論は違ってくるわけでありまして違ってきて当然だろうと思えます。

内閣府の資料は、0歳からおむね30歳までを青少年と呼んでおります。30歳も青年なのかとなると、私どもの頃は、青年というのはせいぜい25までだろうというふうに思っております。これがどんどん自立する年齢がのびて、今は30歳くらいまでというふうになってきたのだらうと思います。みなさんは、今日は北海道の資料がたくさん入っておりますが、どの地域を対象とするか、どの年齢層を対象とするかという絞込みをしたうえでいろいろなデータを読

みこなし、みなさんと協議をした結果、我が地域にとつての青少年問題というのはこれだというものを決めていただく。それが第一段階としてはとても必要ではないのかなということを感じております。

私自身は、ここにいろいろあげましたけれども、これ全部を対象にして地域の子育てを考えても外的外の点がたくさん出てくるのではないかと思います。

つまり地域の子どものは地域の大人と親が力を合わせて育てていくという前提に立っていきますと、このテーマがない地域も出てまいります。自分の地域に起こっていない問題をテーマにしてみても、親、指導者の関心はちつとも盛り上がっていきません。だから先程申し上げましたような方法で、自分の地域の育成課題はなんなのかという絞込みをした上で運動を進めていかないと息切れがしますし、効果もあがっていかないのではないかなと思います。

町をあげての育成運動、県をあげての育成運動の中で馴染むものと馴染まないものがあるのではなからうかと思うのです。た

たとえば、内閣府の白書の中に、いわゆるニート・フリーターがどんどん増えてきたというところで、資料を見ますと160万人くらいニートやフリーターがいるというふうに出ています。これは国全体をあげての数ですから、おそらくある町ではそういう青年は一人もいないということになる場合もあろう。そうすると、ある町の育成課題としてフリーター・ニートをなんとかしようということにしても、ちつとも住民の意識はピンとこないだろう。ましてやこういう問題は、私はどちらかというところと今大事にされている個人情報と抵触していくような恐れがあるので、地域をあげての育成課題としては馴染まないのではないかと。ただ、青少年の育成に関心を持っていらっしゃる方はこういう問題がいろいろなところで起こっているから、そうならないように我われが気をつけようではないか。あるいは、そういう子どもがいるならば、みんな呼びかけてそういう青年を温かく見守って、再発できるような後ろからのバックアップをしていこうではないかというのが受け止め

方としては正しいのではなからうかと思えます。

それで私は、おそらく全国どこでも共通する育成課題というのはなんなのかいという考えました。

私自身としては、1の犯罪の被害に遭う子ども、虐待に遭う子ども、命を落とす子どもの問題というのは、全国のどの地域でもテーマになる課題だと思います。

なぜかといいますと、白書にも取り上げてありますが、毎年犯罪の被害に遭う子どもが全国で一番多かった年は一昨年、一昨々年くらいですが、40万人を超えておりました。それがだんだん減ってきてまして、去年は35万人くらいに減ってきております。それでもなおかつ35万人というのは、統計で表にあらわれた数字ですから大変な数字だと思います。そして中には、その被害に遭って殺されるという事件もあったわけです。

最近の例では、千葉で殺されてしまった。栃木では、5、6年前に小学校2年の子どもが殺されている。まだ犯罪者は見つからないという状況があります。そういう事件

が全国いたる所に起こっていますから、これは大変大きなテーマとしてどの地域でも話題にすべきではないかと思えます。現に子ども見守り隊という全国の運動は、いたる所で住民の強いバックアップをいただきながら現在も進められております。それから、虐待に遭う子どもというのは、全国に4万人くらいいるらしいです。昨夜テレビを見ておりましたら、北海道では虐待が1,700件を超えたということがテロップに出ておりました。これも以前は、隣近所で起こっている事件ではなかったわけですが、いつ隣近所で起こってもおかしくない事件になってまいりました。昨夜のテレビの解説だと、北海道におけるいじめの一番大きな原因は、経済的な不況が起こって、親が自分の生活も苦しくなった。だからこの子さえいなければ子どもの生活は楽になるのになんかということに放置してしまつたというような事件が大変多いということです。

考えてみますと、私は昭和の一桁生まれでございます。その頃は、今よりもはるか

に社会全体が貧乏でありました。そして親はその時自分の子どもを殺すというようなことをしたのだろうかどうだろうかということと重ねながら考えてみたわけです。

そういう悲惨な事件はなかったけれども、子どもの多い家では、まだ小学校に通っている子どもをお手伝いさんとしてよその家に預けたり、農家の家に手伝いにやったりというような事はしよっちゅうあつたわけです。それが今世相、その中が変わってきて、そういうことになってきたのかなという思いがいたします。

その他、どこでも共通する問題は、自然体験とか社会体験が非常に少なくなつてしまつてゐる。自然体験とか社会体験が少なくなるとどういふことになるのだろうか。人間としての能力を十分發揮できない状態が出てきてしまうわけです。

それから、6番目のコミュニケーション能力が未熟になつてしまつた。たとえば、学校の先生に暴力をふるつた子どもを叱つていろいろ説教をする。そのうち怒られた子どもは、頭に血がのぼつて、自分が一体

どういう状況でそういうことをやったのか。それは悪かつたと思つてゐるのか、たいしたことはないと思つてゐるのかという自己表現ができないまま持つてゐるナイフでブスッとやるという、いわゆるキレル事件というのがしよっちゅういろいろなところで起こつております。これは、コミュニケーション能力が低下したという1つの大きな証拠だろうなというふうに思います。



全国的に見てみても、これはいたるところで起こつてゐる子どもの状況だと思ひます。なにかを訊ねても十分に反応が起こつてこない。そしてなにを言いたいのかというのを、じっくり聞いてもなおかつ返事が返つてこない。おそらく少年補導をやつていらつしやる方は、相談助言のあり方というものを勉強しておられて、子どもと目線を同じくしながら子どもの話を聞き取るうとしてもなかなか子どもの意見が出てこない状況にいたるところでぶつかつてゐると思ふのです。これが子どもの大きな問題になつてゐることは間違いありません。

ではコミュニケーション能力というものは一体どういふふうに考えるのか。いろいろ難しい問題があると思ひます。私自身は、自分が思つてゐることを相手に正しく伝える、理解してもらふ。それから、それを聞いた相手の人がなにかを言つてくる。それを受け止めて正しく理解していく能力。それを私はコミュニケーション能力。一方通行では駄目ですが、ボールの投げっこをしてちゃんとやり取りができる状況がコミュニ

ニケーション能力だというふうに思っております。

ところが、このところ日本の子どもたちのコミュニケーション能力というのは、極端に下がってきたといわれます。なぜコミュニケーション能力が下がってきたのだろうかというのをアメリカの社会学者が研究を続けてきました。その結果、ある図式をつくりだしています。

それはどういう図式かといいますと、分数です。学力が低下したというから時々分数のやり方がわからなくなる人もいるかもしれないませんが、コミュニケーションの基本は2です。とにかく2が基本です。そこで、まず家族をYとします。Yの二乗、マイナスYの2分の1はX。

このXがコミュニケーション能力だといえるのです。日本は、先程も出てきましたが、どんどん少子化が進んでまいりました。家族も小さくなってきました。一人っ子というのはさらにあります。そういう家はお父さん、お母さんと子どもが一人ですから、Yは3です。

3の二乗は、9です。

9から3を引くと6です。

6を2で割ると3です。

3人家族のときは、コミュニケーションは3通り起こってけるといいます。夫婦と、子どもです。

では、家族が1人増えていくとどうなるのか。そうしましたら、みんなたぶん4くらいだろうと思つたわけです。ところがそうではなくて、4になると、 $4 \times 4 = 16$ です。16から4を引くと12です。12を2で割ると6です。

一人人間が家族の中に増えることによつてコミュニケーションのケースは倍になっていくわけです。一人黙っているわけにはいかなくなるわけです。

みなさんの場合はどうでしょうか。家族を振り返つて見て、兄弟が5人いたという人はいらつしやいますか。手を挙げてみてください。

結構いらつしやいますね。

私は、兄弟12人おりました。男8人、女4人です。随分夫婦仲のよい家庭に生まれ

て幸せだったと思います。それは余計なことですが、そうしますと私のコミュニケーションの本数というのは勘定できないくらい増えていくわけです。一人黙つて考え込む状況はできなくなります。誰かが何かを聞いてくる。それに答えないと親が心配して、「どこか体が悪いのではないか」とケアをしてくれるわけです。そのことによつて自然にコミュニケーションをする力が身に付いていったわけです。だから50歳以上の方でコミュニケーション能力が落ちてきて付き合いくいというケースは、滅多に聞いたことがないです。

そのうえ、私どもの世代は、先程地域との交流という話がありましたが、家庭の交流の他に地域の交流があるわけです。地域に出て行くと、私みたいな12人の兄弟がいる他に、地域には同世代の子どもがゴロゴロいるわけです。取っ組み合いをしたり、喧嘩をしたりしながらやる中でコミュニケーションをせざるを得ません。

その他に地域には子どももいれば大人もいるわけです。大人もしょつちゅう声をか

けてくれる。声をかけてきてそれに返事をしないと怒られるわけです。その大人から怒られるだけではなくて、その大人が私の親にご注進というか、伝えるわけです。「お前の家の文三は、俺が今朝おはようと言ったのに聞こえているのか聞こえていないのか知らないけれども、あの野郎は返事をしなかった。お前の家の教育は一体どうなっているんだ」と言ってくるわけです。そういう地域社会だったわけです。ところが今それもなくなっている。

我が国の子どもたちは、なかなか自分の意見を人に伝えるということができない。人が言ったことを正しく受け止めること、能力がうまく育っていないかという一面があるわけです。

その他にも日本の社会は非常に便利な社会になりました。子どもでも、ひとこともものを言わなくてもどこからどこまで行く切符をちゃんと買えるわけです。そこに行く交通手段も、「おはよう」とかなにかを言わなくてもバスに乗せてくれます。電車にも乗せてくれます。挨拶しなかったからお

前は乗せないという運転手さんはどこにもいないです。あまりにも便利になったおかげでものを言わない無愛想な子ども。子どもだけではなくて大人も無愛想になってきました。うんと混んでいる電車の中、バスの中で、降りる時はボタンを押してくださいというからボタンを押す。混んでいます。昔だったら、「すみません、降りますので」とみんな声をかけたものですが、そういう声をかける大人も少なくなっている。押し分けて行きます。押し分けて行くと、そこにいろいろなあつれきが起こってくる。つまりないことで喧嘩をはじめるといってはそういうせいもあります。

私は、コミュニケーション能力が未熟になったためにいろいろな青少年問題が起こっている。それをなんとかしなければいけないというのは、どこの地域にとっても大きな課題ではないかと思えます。

それから、いじめとか不登校がどれくらい起こっているかというのは、統計を見ればわかりますが、あまり問題にしないでいい地域もあります。どこでも問題にして

いいテーマは9番目です。社会の基本的なルールを守れない青少年がたくさん出てきた。特に高校生以上の青年たちが社会のルールを、守らなければいけないと思っても守ってくれない。そういう青年の問題もあります。

私は、これらの問題をなんでもかんでも取り上げるといってはなくて、自分の地域の青少年はどういう状況なのか。その状況を踏まえて地域の大人、青少年育成の指導者は自分たちの地域の青少年のこのことをみんな取り上げて、こうしたらいいのではないか、ああしたらいいのではないかという相談をして、それで目標を設定していかなければ効果のある青少年育成運動はできないのではないかと思います。もちろん、悪いことをするなよという予防活動というのはどこでもやらなければいけない。起こってから、いくら手を尽くしても間に合わないというケースもたくさんあります。そうならないようにするにはどうしたらいいかという姿勢で青少年の非行の問題は取り上げていかなければいけない。そうしな

いと非行が起こった状況で、この子どもをよつてたかつて良くしようというのは、どこか違和感を覚えます。レッテルをはってしまふような感じになってしまいます。私は、それが地域で子育て、あるいは育成をする際の大変大事なポイントの一つではないのかなと思います。

そしてその際は、青少年が育つ場は、家庭と地域、学校です。家庭の状況、地域の状況、あるいは学校における教育の状況を合わせて親の立場から、指導者の立場から点検していくのも当然のことではないのかなと思います。

## 二二 育成の場の現状

資料2のところに図表をかいてみました。青少年というのは、どこでどういうふうにして育っていくのだろうという関係図をつくってみました。私は、こういうふうには教えられませんでした。子どもは、家庭・家族の中で大変素直な力の強い芽を育ててあげて。家庭では、人間としての丈夫な芽を育てる。

学校では、いい芽を持った子どもを、だんだん曲がっている枝を少々のはいたり真っ直ぐにしたり、伸びるところはもつと伸びるのだというふうな見込みをつけてその芽を正しい形に花を咲かせていくのが学校の仕事である。

それから家庭の芽、学校の花、そして実を实らせるのは地域だ。この三者がうまく力を合わせる。その持っている特長を合わせながら協力していく。それが連携ということなのだ。と教わりました。一頃文部省では、学校と家庭と地域の融合ということをおっしゃっていました。融合というのは、核融合みたいにとにかく家庭教育なのか学校教育なのか地域の教育なのかわからなくなってしまうのを融合というのだと私は思っています。あまりいい言葉ではないなと思っています。やはり家庭には家庭教育の特長と押さえないといけないポジションがある。地域もそういう本来の役割がある。学校にもそういう役割がある。これをミックスしてしまつて、どこが学校の仕事なのか、家庭の仕事なのかわからなくなるのは

よろしくないと思つておりました。

そこで最近はどうぞん変わつてきまして、特に地域の青少年に対する関与の仕方というのはどうぞん希薄になってきました。したがつて、これを点線で示しました。このところどこからの影響が一番強くなつてきたかというところ、大人が喜びそうな施設がどうぞん社会が増えてきて、それを享楽環境というふうに呼んだのですが、具体的に示しますと、この資料の下のほうに社会の問題として、下の四角に有害環境のことをたくさん並べておきました。後で読んでいただきたいと思います。

そして、地域の大人たちの行動を見てみますと、子どもの手本になるような大人がどんどん減つてきているわけです。特にここ2〜3年日本全国を眺めて見ますと、悪い大人がたくさん出てきてはじめました。腐った米をちゃんとした米だと嘘を言つてお金儲けをしようという大人が出てきたり、名門といわれる料理屋とかお菓子屋が嘘を言つてみたり、というような大人。子どもだって悪いことだとわかつていそうなものです

が、それを堂々とやる大人が本当に増えてきて世の中がだんだん悪くなっている。

そして、もっと悪いことには、(3)の大目に見る社会風潮。悪いことをしていても注意しない、叱らない、罰しない。そういう大人がどんどん増えてきました。

もっと悪いのは、お金お金お金で儲かればいいではないか。見たいという人がいるのだから少々悪いテレビだって人が喜んでくれて視聴率が上がっていいではないかというメディアも出てまいりました。

そしてもっと悪いのは、(4)の情報メディアです。中でもインターネットがどうのこうのというのは、もう個人の力ではどうにも手をうてない状況までなっていて、最近いろいろな方々が、これはいけないということでもなんでもかんでも法律で縛りましたよという動きさえ出てまいりました。しょうがないと思うのです。

そういうふうに社会の状況というものが変わってきたところに大きい問題があるのではないかという感じがいたします。家庭でも社会でも、みんなが大目に見てくれる

ようになる。子どもは、言葉を悪くいえばやりたい放題。そういう子どもが増えていく原因になってきてしまったのではないかなと思います。

今日お出での方々の判断はそれぞれ違う点があるだろうと思うのですが、私はここにある資料として取りまとめたように、どうも大人の姿勢がいろいろな問題を生んできたのではないかと思います。

### 三、青少年育成の課題と原点

今まで申し上げました1と2の状況を踏まえて、ではどうすればいいのだろうかというのが今日の主テーマになるのだろうかと思います。

それで、この運動の最初の標語でありました「大人が変われば、子どもも変わる」という問題をもう1回取り上げる必要がある。

そうしましたら、一体大人のどこをどう変えればいいのかという質問をいたるところで浴びせられました。このところチェンジというのが1つのはやり言葉になって

きました。アメリカの大統領がチェンジチェンジとおっしゃるので、日本でもそういうことを言わなければ時代遅れになると思っているのかもしれませんが、アメリカの大統領がおっしゃっているチェンジと日本の政治家が、ある人はメモを見ながら訥々とチェンジを訴え、ある人はこぶしを振り上げながらチェンジを訴える。私は、どうも内容が違うのではないかなという感じがするのです。

アメリカの大統領は、現在の不況を乗り切るために、私にも責任がある、みなさんにも責任がある。だから一緒に責任をとってやりましょうという姿勢があるような感じがするのですが、日本の政治家は、ありがたいことに「私の党が全部やってあげますから、どうぞ安心して着いて来てください」みたいなチェンジの姿勢が目に見えて、それでいいのかなという思いがします。それは主題ではありませんので、これは枕詞みたいに申し上げたことであります。

私どもは、チェンジということをここ2年、3年で言ったわけではない。先程も申

し上げました通り、10年も15年も前からチェンジということを書いてまいりました。

そこで、私のいうチェンジというのは、もう1回青少年育成の原点に返りましょうという意味であります。今まで進んできた方向を変えるということではなくて、青少年の育成、子育てというのはなにかという原点に戻りましょうというのが私の申し上げるチェンジであります。そこを変えていかないとうしようもないのではないかと。つまり、親を親とも思わない。先生を先生とも思わない。大人を大人とも思わない。そういう子どもがどんどん増えてきまして、いろいろな問題をいろいろなところで起こしている。だから子どもを育てていくという基本は一体なんだったのか。青少年を育てるといって一番大事なポイントはどこだったのか。それをそれぞれの思いを基点にしながら原点に戻りましょうと言いたいわけです。

私の申し上げたい原点は、レジユメの4のところにあげました4つくらいあります。まず第一に、人は生まれてくればみな人間

になるのだろうかという質問であります。これに対しては、みなさんどう思われますか。人は生まれてくればみな人間になるのだろうか。

どうもそうではないような感じがするのです。全国的に有名になりました旭川の旭山動物園。かわいいペンギンちゃんがヨチヨチ歩きをしております。白熊君も元気よく飛び込んで人を驚かせております。素晴らしい動物たちだなと思えます。あの動物たちは、自然にああいうことをやるようになったのでしょうか。厳しい訓練を経て、はじめてああいうことをやるような動物になったのだらうと思うのです。動物さえそうならば人間だって放っておけば、まさに人間も動物の一種ですから動物の本性をそのまま身に付けていってしまうのではないかと思います。

たとえば、私が最近見たテレビ番組で30人31脚競争というのをやっています。小学校の4年生、5年生です。北海道の学校も10本の指に入るような活躍をしていました。あの学校は、西当別小学校の子どもたちが

30人31脚の30m競争で、確か5番か6番に入りました。これのリーダーという子は、そのテレビ局の解説によりますと、不登校の子どもだったそうです。それでリーダーとして抜擢されて30人の子どもをまとめて、30人の子どもが2人3脚みたいに足を紐で繋いで走るわけです。すごいスピードです。確か9秒か10秒くらいで30mを走ってしまわわけです。訓練をしなければああいうふうなことはできないだろう。

そのリーダーの話を知ると、「私も途中で嫌になりました」というようなことを何回も言っていました。みんなが「頑張ろう、頑張ろう」と言ったからこういうふうにするようになったのですという話をしていました。

もう1人北海道で紹介したいのは、帯広のさくらまやさんです。演歌のとてもうまい、あれは天才です。人間にはああいう種類の天才があるのだらうと思うのです。それを誰が見付けてくれて、ああいうふうに伸ばしたか。伸ばす過程では厳しい訓練があつたのだらうと私は思います。

そういうことを見ていると、私もは、人は人らしくなるためにそれなりの訓練をしていかないと人らしくならないのだというのが私の信念であります。これはみなさんも同じだろうと思います。

それから2つ目の原点は、その流れの環ですが、人間は1人では生きて行けません。一人では生きて行けないから、隣の人と仲良くしなければいけないのです。仲良くするためには、コミュニケーション能力を身に付けていかなければいけない。不思議だなと思ったら自然に問いかけをしてそれに答えていけるような人間関係をつくっていかねばいけないわけです。

そういうことを考えますと、原点の大事な2番目としてコミュニケーション能力をどう育てていくかというテーマがある。先程言いましたように、子どもが一人だったら、能力があまり育たないからもう一人子どもを生んで4人にしようかという考えを持つてくれば、今の少子化に歯止めがかかるからそれもいいです。しかし、もう私も無理だわとお考えの方は、しようがな

いから一人でも子どものコミュニケーション能力を育てていくためにはどうしたらいいのだろうかと考えてみて下さい。

内閣府の統計を見てみますと、子どもとのコミュニケーションをどういうふうにして取っているかというデータが入っております。それを見てみますと、親子の語らいがないのです。特にお父さんの子どもに対する接し方というのは、極端に少ない。しかもそのコミュニケーションを十分取っているという家庭の状況を聞きますと、携帯電話でコミュニケーションを取っているから大丈夫だと思っという人が随分いらつしやる。それから会話ではなくて通常電話でコミュニケーションを取っているから大丈夫だと思っという人がたくさんいらつしやる。電話による、あるいは携帯電話によるコミュニケーションもいと思うのですが、そこには血の流れるような温か味が出てこないです。そうするとコミュニケーション能力というのは、おそらく十分には育っていないのではないかと思います。

3つ目は、人は人間らしい心と態度を習得しなければ、やはりなにか困った状況の中になると動物と同じような状況になってしまうと私は思います。

それでは、人間らしい態度を習得するというのはどういうことなのだろうか。私はこのことを親の育ててくれた一言ひとことをもう1回思い出しながら整理してみました。みなさんも、あの時親は私になにを言ってくれたのだろうか。隣のおじさんはなんと言ってくれたのだろうかということを出しながら、1つご自分のことを整理してみたいと思います。

私は、資料2-2に親から学んだこととして、これこそ人間らしい人間になるための教えだっと思うことを後になってから整理しました。一言でいうと、豊かな心、健やかな心、それをちゃんと身に付けるのが人間らしい人間になるための道だよと教えてもらったような感じがするのです。

それから2つ目には、社会の決まりを守りなさい。具体的には、人様に迷惑をかけるな。後ろ指をさされるようなことをする

な。しょっちゅう言われました。この豊かな心を育てる、健やかな心を育てるといのは、具体的にはどういうことなのだろう。私もよく人から聞かれますが、私は母親がいつも言っていた言葉の中から思いやりの心、感謝の心、人様に親切にすることと、それから奉仕の心。これは大事なことだよと教わりました。奉仕の心というのは、私の母親は明治中頃の生まれですからたいした学校も出ておりません。仏教に出ている言葉の中から無罪の七施という言葉を用いて、人様に奉仕するというのはどういうことかを教えてもらいました。ここにあって眼施、和顔悦色施、言辞施、身施、心施、床座施、房舎施という7つ。人間は1銭もお金を持っていなくても、こういうことを人様にやるということが奉仕することなのだと思われました。とても大事なことだと思ふのですが、眼施というのは、相手を優しい眼差しで見詰めるということです。私などが優しい眼差しをして見詰めると、なんだこのやろう魂胆があるのではないかとと言われる場合もありますから気をつけな

らやらなければいけないことかもしれないですねけれども、とにかく大事なことだろう。

この中でもっとも私が忘れられないのは、最後の房舎施です。これはどういうことかということ、利益を独り占めにするということなのです。田舎に住んでいる頃には、よく物貰いのお坊さんみたいな人が来ました。墨染めの衣を着てチーンと鳴らして、母親はすぐに出て行って、湯飲みに一杯米を持っていつてあげる。そこまでは、昔の人はやったことだろうと思います。うちの母親が言っていたのは、一言付け足していました。なにを付け足したかというと、「あなたは、今日泊まる所はあるのですか」と言うのです。「もしないのであれば、誠に失礼だけでも、うちの馬屋の二階はとも暖かいからあそこで寝なさい。いいですよ」と勧めていました。私は、これはなかなかいえることではないなと思ったのです。調べてみたら、そのことが房舎施。

人様と仲良くするための1つの方法です。たとえば、傘をかしげて狭い道路で人と行きかう時に人に雫が行かないようにする。それから、座る席がないときに、電車というのは7人で座れるように設計してあるのですが、そこに足を投げ出して6人か5人で座っている時は、こぶしひとつずつ間を空けて座るような場所をつくりなさいというのがありますけれども、そういうような行い。強い心とか敬愛する心、耐える心。



親父がしょっちゅう言っていた言葉を整理したのがこれです。誘惑に負けない、我慢。動物は我慢をしないです。ところが旭山の動物は、ちゃんと我慢するようになっていく。訓練すると動物でもやるわけです。最近敬愛する心というのがないので時々学校とのあつれきが起こるわけです。

たとえば私は、先生というのとはかく偉い。だから先生から怒られても口答えはすると言われた。しなかつたわけです。

しなくても毎日ほとんど竹竿でやられていました。今日も先生からやられたと言つて帰ると「お前がなにか悪いことをしたんだ」「いや、しなかつた」「変なことを言うな。悪いことをしないのに先生が手で頭をぶつはすがない。お前がなにかきつと悪いことをしたんだ」と逆に怒られたものです。先生というのは、とにかく尊敬しなければいけない。今はどうでしょうか。尊敬しなければいけないのでしょうか。先生も友達みたいなものだという姿勢になっていやすいのだろうか。

畏怖するというのは、ばあさんから教わったことです。うちのばあさんは、目が見えませんでした。私が学校から帰つて来て靴を放り投げて遊びに行く。帰つて来ると、「おかえり」そして二言目には「今日はどこで悪いことをしてきたかね」と言われるのです。「悪いことはしてこなかつたよ」「本当か」3回くらい「本当か」と聞かれます。「本当だ」と言うと、「じゃあよろしい。あがりなさい」

あがつてすぐ囲炉裏の所に座ろうとする時、「まだ座つては駄目だ」「どうすればいいの」と聞くと「仏様のところに行つて鐘を叩いて拜んでこい」と言うのです。拜んでくると座らせてくれる。時々悪いことをすると仏様の前に連れて行かれて、地獄極楽の図とかいろいろ見せられて、「嘘を言うところいうことになるんだ。嘘は泥棒のはじまりだぞ」と言つて教えられた。「だいたいお前がどこでなにをしてきたかはお見通しなんだ」と言うわけです。「お見通しつて、おばあちゃんは見えないくせに、どこで見ていたんだ」と悪たれを言うと、「おば

あちゃんが見ていたんじゃない。お天道様が見ているんだ」「お天道様は、今日の北海道のように曇っていると見えなくなるけれども、その時はどうするんだ」と聞くと、「仏様というのは、曇つていても見えるんだ」「なぜだ」「仏様、神様は木の上とか葉っぱの上、いつもそういうところに立つていらっしゃるつて見えているんだ」

そこで、いたずらをする時にはそこを見上げて仏様らしき人がいないなということを確認していたずらをしたものですが、そのことはなんだったかという時、人間というのはそう大きな力を持った存在ではない。人間の力を遥かに超える力を持った人がいるんだ。そういうものに対する恐れ、心、気持ちを持つていないと道を誤る。私は、こういうことだったのだからと解釈をしております。

おそらく似たようなことは、みなさんも親から度々言われたことだろうと思います。それぞれ違うと思います。そういうことを人間らしい人間になるように常に心掛けて教えていかなければ、子どもというのは人

間らしくなっていくか。そういう教えは、いかなければ人間力をどう養うかということです。その基本に立って社会も学校も地域も家庭も人間力とか社会力をどう身に付けさせていくかなという共同歩調を取らなければいけない大事なポイントなのだろうと思います。

## おわりに— やっぱり大人が変わらねば

さてそういうことで私が5番目に、やはり大人が変わらねばということを書いたのは、今まで進んできた方向を是正するのはなくて、大人がどこが大事だということを見詰めて、原点に戻ってそれを基礎にして子どもには教えていかないとかなかなか徹底しないのではないか。子どもの行動というものは変わっていかないのではないか。それを頭から押し付けるのではなくて、じっくりと教えていくということが大事なだろう。

人間を教育する方法としては、いろいろな方法があるわけですが、2ページに書き

ました通り、保護・育成、教育・指導、感化・影響、矯正・指導、相談・助言というような方法があります。私は、この中で一番大事なのは、特に家庭とか地域の親とか大人がやるべき青少年育成の営みというのは、感化とか影響ということだろう。言葉を変えると、後ろ姿で導くという言葉があります。子どもは親の背中を見て育つ。大人の背中を見て育つ。そういう意味からいうと、背中を見せてあげられないような大人がこのところ増えてきてしまっているので、大人のみなさんは子どもに背中を見せて子どもに感動を起こさせるような行動をしましょうということの呼びかけをしたいわけであります。そのためには、やはり子どもをどう育てていくかという目標をそれぞれ持つべきだろうと思うのです。

大変ユニークな過去の文部大臣で稲葉修さんという方がいました。この人に新聞記者が「大臣、どういう子どもを育てたいのですか」と聞いたら、「一に健康、二に人柄、三四がなくて五が頭」という答えをしたそうです。今はどうなのでしょう。一に健

康というのは、みなさん願っていると思います。ところが、この健康も最近はややくなってきました。だから、二に人柄、三に人柄、四に人柄、そういう考え方を持って指導している親、大人。それを目標にしている親、大人がだんだん減ってきて、一に健康、二に頭、三四も頭、五も頭というふうな感じになって、とにかく学校の成績がよければ人柄が少々悪くてもいいではないかみたいな感じの子育てになっていやしないのかなという感じがいたします。

そして子どもを一番安心させる育て方というのは、古今東西の先達がいろいろなことをおっしゃっています。自分自身の体験も加えて考えますと、アメリカのある学者が人間が欲望を達成していく五段階法というものをまとめています。それを見ると、生理的な欲求を満たさせてあげる。食べ物が食べたい時に食べられないと人間は落ち着かないです。それから安全安心だなどというような環境をつくってあげること。それから、自分は愛されているんだなという思いが子どもに伝わるようなことが大事だ。

そして、ちゃんと居場所があること。そして、子どもが自尊心を持てるような環境をつくってあげる。一番最後は、自己実現、子どもが身に付けた能力で自分を発揮できていくような機会をつくってあげること。これは、とても大事なことでと思います。私自身もそう思います。

振り返って見て人間というのは、うんと能力が伸びる時期と力を入れてやってもなかなか伸びていかないで反発ばかりする年頃というのがあります。そこを見計らって大人が、極端にいうと子どもの自尊心をくすぐっていく。あるいは、「お前は大事にされているんだよ」という思いがちゃんと伝わっていくような環境をつくってあげる。「お前はたいしたもんだよ」と言つて褒めてあげるといふようなことが大事なのではないかと思えます。

私は、小学校4年まで毎日学校に行つて喧嘩をしておりました。5年の時にある先生と巡り合ひまして、「お前は、喧嘩が一番だったんだから、方向を変えて勉強をする」と、もしかするとお前は一番になる可能性

があるよ」なんていうことを、嘘だったのか言われまして、「先生どうすればいいんですか」と聞いたたら、「朝20分早く起きて学校に来る前に国語の本を10分間大声をあげて読みなさい。学校から帰ったら、10分間大声をあげて本を読みなさい」それを言われて、本当にやってみたら本当に一番になってしまったのです。小学校のその頃というのは、5年、6年頃というのは知恵も体力もうんと伸びる時期ではないか。先程小学校の話をしました。反発心も起こってくる年ですが、その少し前に「お前、今日はやつたな」といふようなことを言う。一番最後に英語で書いたのですが、toleranceです。toleranceというのは、寛容ということ。緩やかにする。アメリカのクリントン政権の時代に学校で大変な暴力事件が起こりました。日本でも今小学校の子どもたちが先生に暴力を振るう事件がものすごく増えています。アメリカでいろいろな研究者が調べた結果、なぜこれほど暴力が起こるのか。出てきたのが、toleranceをやめようではないかというのが方針です。要するに寛容

さをやめよう。子どもと、これとこれとこれをこういふふうにしなければ、君はこういう罰を受けるよという約束をして、それを守らせるというのがtoleranceへの方向転換だったわけ。日本の文部省でもしばらくやろうとしたのですが、いろいろな反発が起こってきてあまり進みませんでした。今やっぺらっしやることは、早寝早起き朝ご飯という大変素晴らしい標語で、青少年の育成を応援してくださっているようです。これも大事なことで、合わせて友達先生、友達親、これからそろそろ抜け出して、toleranceということをよく考えて、ほどほどにやりましょう。それが子どもを立ち直らせる大変大事な原点になるのではなからうかということ結びにいたしまして、勝手な話が随分ありましたが、これから先の青少年育成をどこでどう進めていくかという話を終わらせていただきたいと思います。

なにか参考にしていただけるところがあれば誠に幸いであつたと思います。どうもありがとうございます。